

平成二十八年年度聖ドミニコ学園中学校入学試験（第一回）

国語

◎ 次の注意事項を読んでください。

- 1 試験開始のチャイムが鳴るまで開いてはいけません。
- 2 問題はぜんぶで8ページあります。
- 3 解答用紙は問題用紙にはさんであります。
- 4 解答用紙に受験番号、氏名を書いてください。
- 5 答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 6 字数は、句読点や「」をすべて一字に数えます。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本語を話せる外国人と話していると、「主語は誰ですか」とよく聞かれます。日本語をかなり理解する人でも、日本人の会話から主語を読み取るのはとても難しいようです。

日本人同士なら、私が、

「昨日Aさんに会いました」

こう言っただけで、主語は「私」であることが雰囲気です。

「昨日私はAさんに会いました」

このように主語をはっきり言うのは、「私は」をキョウチヨウしたい、何らかの理由があるときです。ほかの人ではなく「私自身」が会った、というニュアンスです。

これに対して、英語では常に主語がきつちりと示されます。そのため英語圏出身の人は、日本人と話をしていると誰が何をしたのかわからなくなってきました。違和感があります。

似たような違和感、実は日本人も古典を原文で読むときに感じています。日本文学を代表する『源氏物語』もそうですが、

C 平安文学では主語がない文章がよくあります。

平安時代の人々の感覚では、人の名前を呼ぶのは失礼なこと、官職や屋敷の住所を名前がわりにして、「頭中將」「九条殿」とか「淀のわたり」などと呼び、手紙の署名も頭文字ひとつということも普通でした。しかし、私たちには、平安時代の地名で人名を推測し、述語、目的語だけで誰のことを読み取るのとても難しく、クイズのようです。

外国の人は日本人の会話にそれと同じくらい落ち着かない、不安なものを感じるようです。

主語がはっきりしないのは、外国人と話しているときはもちろん、日本人同士でも誤解を招くゲンインにもなりますが、悪いことばかりではありません。日本人同士で会話をしているときには、主語がないのがかえってX点になっていることもよくあります。

1、他人に自分がした失敗を批判されるときに、「それは、よくなかったわね」

「あなたがそういう行動をとったのは、よくなかったわね」同じことを言われるのでも、主語なしと主語ありでは、インシ

ヨウが大きく異なるのではないのでしょうか。日本人なら、いっしょに残念だと共感する気持ちがあったよう前者を、よりあたたかいユウコクとして受け止める人が多いはずです。

主語があいまいで、誰が何をどうしたのかはつきりしない。日本語のそんな特徴は、オブラートに包むようにして感情を伝え合うのに向いています。それは日本語だからこそ可能な、思いやりの深いコミュニケーションといえるでしょう。

あれこれ理由を論理的に並べ立てないで、感情を共有することによって心の安定を得ることができます。

しかし、ものごとを決定し、取り決めをつくるときはそれがマイナスになります。

日本人でも英語を使って外国人と話しているときには、主語をメイカクにせざるをえません。しかし、日本語に特徴的な思いやりの深い、遠まわしな表現をそのまま英語にすると、やはり誤解が生じてしまいます。

典型的な例が、相づちの「そうですね」と言うつもりで「イエス」「イエス」と言っていたら、賛成だと思し表示をしたと思われることです。3、日本人が商談などで頻繁に使う、

「^⑨検討します」

という言葉は外国人には通じません。

日本のビジネスマンなら、「検討します」が「それに^⑩カンシンはありません」「今まで考えていませんでした」「実行するのは難しい」という気持ちを婉曲にあらわすものであることを知っています。本当に検討するつもりときは、「前向きに検討します」と言うのが一般的でしょう。

4、英語の「検討します」にそのような意味はありません。

「検討します」と言われた外国人は言葉のままに受け取って、その後しばらくたってから、

「あの件について結果はどうになりましたか」と、尋ねてきます。

断ったつもりでいた日本人はびっくりしてしまいますし、会社で検討してくれるものと思っていた外国人は、日本人に強い不信感を抱きます。

(坂東眞理子『美しい日本語のすすめ』より)

問一 線①「キョウチョウ」、②「頭文字」、③「推測」、④「誤解」、⑤「ゲンイン」、⑥「インシヨウ」、⑦「チュウコク」、⑧「メイカク」、⑨「検討」、⑩「カンシン」のカタカナは漢字に直し、漢字はその読みを答えなさい。

問二 空欄 1 4 に入る最も適切な語を次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい(同じ記号をくり返し使うことはできません)。

ア また イ しかし ウ たとえば エ さすがに

問三 線A「日本人の会話から主語を読み取るのはとても難しい」とありますが、では、どうして日本人同士なら主語を読み取れるのですか。解答用紙の「主語は」に続くように、10字以内で説明しなさい。

問四 線B「違和感がある」とありますが、ここでいう「違和感がある」とは、どのように感じることでか。解答用紙の「を感じることに」につながるように、本文から12字でぬき出しなさい。

問五 線C「平安文学では主語がない文章がよくあります」とありますが、それは当時の人々のどのような考え方が影響しているか。解答用紙の「であるという考え方。」につながるように、本文から14字でぬき出しなさい。

問六 線D「悪いことばかりではありません」とありますが、では、「よい」と感じるのはどのようなときですか。本文から18字でぬき出しなさい。

問七 空欄 X に入る漢字を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 減 イ 加 ウ 長 エ 利

問八 線 E 「思いやりの深いコミュニケーション」とありますが、どういう気持ちに「思いやりの深さ」を感じるのですか。本文から16字でぬき出しなさい、

問九 線 F 「頻繁に」の意味を次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 適当に イ 特別に ウ しきりに エ いいかげんに

問十 線 G 「外国人は、日本人に強い不信感を抱きます」とありますが、その理由は何ですか。次の文の空欄に入る言葉を、本文から11字でぬき出しなさい。

外国人は、日本人と違い（ 11字 ）しまうから。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

中学二年生の征人（おれ）は、沖縄の離島「天徳島」で暮らしている。同い年の孝俊、保生と仲が良く、いつも三人で遊んでいる。三か月前、タオという同い年の男の子が、東京から転

校してきた。征人と保生はタオのことを気に入っているが、孝俊はタオのことを嫌っている。次の文章は、三人が崖から海へ飛び込む遊びをしているところに、タオがやってきた場面である。

「こんにちは」

突然の声に、思わず肩が持ち上がる。振り向くと、そこにはタオがいた。驚いた。まったく気が付かなかった。

「飛び込み？」

捉えどころのない、なんの感情もないような表情で聞いてくる。

「あ、ああ、そうだよ」

声が①ウラ返ってしまった。②気配を察したのか、孝俊と保生が

上体を起こす。

タオの姿を見て、孝俊が眉根を寄せた。保生は困り顔だ。タオは二人の様子におかまいなしで、崖の先端まで行き、

「ここから飛び降りるの？ すごいなあ」

と、A 質問なのかひとり言なのかわからない一本調子で言った。

それから崖を見下ろして、遠くの海を見て、手をかざして空を見て、また海面に目をやるという動きを何度か繰り返した。

気まずいのはおれたちのほうだった。なにを話していいかわからないし、孝俊がイラついているのも伝わってきた。タオは暑いなあと言つて、首に巻いたタオルでのんびりと額の汗を拭いたりしている。

「お前もやってみ」

突然、孝俊が口を開いた。

「え？」

「飛び込みだよ。」**③** **カンタン**だよ。ここではみんなやってる。B
ここに住んでるなら、お前もやれ」

タオは涼しげな表情で、どうかなー、厳しいだろうなー、と誰にもなくつぶやいている。

「やってみーって」

「えー、やるなー、孝俊」

思わず声をかけた保生を、孝俊がにらむ。

「港のほうでよくやってただろ。(注1)同じさー」

孝俊がおおる。確かに午前中にやった宗見港のほうの防波堤では、タオが飛び込みをしているのを何度か見かけたことがあった。タオ

は飛び込みよりも、シュノーケリングが好きな様子で、シュノーケルと足ひれを着けて、海面をバチャバチャと泳いでいるのをたまに見かける。ここの人間で、泳ぐときにシュノーケルや足ひれを着ける奴なんていないから、いやでも目立つ。

「飛び込んでみー。気持ちいいよ。泳げるんだろ」

「いや、ぼくはあまり泳ぎは得意じゃないよ。フィンがないと無理だと思う」

ああ、足ひれのことをフィンと呼ぶんだ、とおれはそんなことを思った。

「無理しないほうがいいよ」

保生が言い、

「そうだよ、この高さはきついよ。やらん方がいいよ」

と、おれも**④** **カセイ**した。海で無理をしてはいけないことは、身体がよく知っている。

「お前たちは黙れ。どうか、タオ。やらんのか」

タオは少し考えるようなそぶりを見せてから、「やめておくよ」と言った。

「港のほうで練習して、もつと泳げるようになったらいつか挑戦したい」

「使えんな。だから東京人はダメなんだよ」

タオは、意味がわからないといった顔で首をかしげた。その表情で**a** 孝俊がイラついたのが見てとれた。

「ここ、何メートルあるの？」

「六メートルくらいじゃないか」

と、おれは答えた。タオは崖の下を興味深そうに覗き込んでいる。

「高いなあ」

しみじみと言う。

「高くない。やってみー」

孝俊がタオの後ろに立った。

「足をここに掛けて、一歩進むだけ」

タオが崖に足をかける真似をした。孝俊がもう一歩近づく。

「C 孝俊、やるなよ。わかってるよな」

保生が少し大きな声を出した。おれは、まさかと思っていた。**b** 孝俊だって、そんなばかな真似はしないだろうと。孝俊がほんの一時、おれたちのほうを見た。

「孝俊」

保生が**⑤** **サイド**、声をかけた。その次の瞬間、孝俊がタオの背中にスツと手を伸ばしたのが見えた。

「やるなっ！」

保生の声と、タオの破裂音のような短い悲鳴が聞こえた。タオが

手をばたつかせ、海に吸い込まれていくのがスローモーションのように見えた。

「タオッ！」

保生が叫ぶ。長い時間を感じられた。突然、盛大なしぶきがあたり、タオが浮かんで、また沈んだ。大きなしぶきが立つ。おぼれているのだ。

保生がすぐさま飛び込んだ。考える間もなく、おれも続いた。タオは⑥無様に手足を動かして、必死に保生にしがみついた。

「タオ、大丈夫！ 落ち着け、落ち着け！」

タオは無我夢中で手足を動かす。完全にパニックになっている。このままでは、こっちまでおぼれてしまう。

「大丈夫やさ！ 落ち着け！」

おれもタオにしがみつかれて何度も顔が沈み、海水を飲んだ。鼻が痛い。目がしみる。

保生と二人で、何とかタオの左右の脇に肩を入れ、必死で岩場まで連れて行った。

「タオ、大丈夫かっ」

タオは激しくむせている。その顔は真っ青だった。眼球が泳いで白眼になった。

「タオッ！ しっかりしえ！」

タオはそのまま意識を失った。

(中略)

翌々日、三人でタオのお見舞いに行った。タオは c 体調がよ

くなったのか、いつも通りの様子で、本を読んでいた。

1

「タオ、ごめんな」

「本당にごめん」

おれと保生は頭を下げた。孝俊は i 口をつぐんで、一緒に頭を下げた。ただだった。タオは首を振って「いい経験させてもらったよ」と、唇の端を持ち上げた。笑ったのだと思う。

2

タオの家は本だらけだった。本棚に入りきれない本が、そこらじゆうに ⑦無造作に ⑧積み重ねてあった。ここだけ別世界のようであれはちよつと興奮した。夢中で眺めていたら、おじさんが、「読みたいものがあつたら持つていっていいよ」と声をかけてくれたけど、d どれが読みたい本なのかすらわからなかった。

3

帰り際、おじさんが、

「タオとまた遊んでやってください」

と急にかしこまって言い、おれたちはへどもどして頭を下げて、タオの家をあとにしたのだった。

4

「孝俊、ちゃんとタオに謝るまでおれは許さん。命にかかわることだ」

タオの家からの帰り道、保生が厳しい口調で孝俊に詰め寄った。

D こんな保生を見るのははじめてだった。これまでも孝俊はどこか、おれと保生を子分のように扱っていたし、リーダーシップのある

孝俊の言うことは、おれたちも自然と受け入れる態勢になっていた。孝俊に面と向かって歯向かうなんて、これまで一度もなかったことだ。

「……冗談のつもりだったんだけどよ」

父ちゃんに殴られて目の下を紫色にした孝俊が、ぼそりと言う。

「冗談ですむか。わかっていたら」

保生の言葉に孝俊は黙っていたが、保生はかまわず続けた。

「そもそもお前の考え方におれはついていけない。新しく来た人がなんで悪い。ここに住むんだよ。天徳の人間はどんどん減ってる。感謝するんじゃないかって、いじめるんか。おかしいだろ。(注2)内地人も、本島の人間も、この人間もみんな同じ。差別するな」

しばらくの沈黙のあと、孝俊が口を開いた。

「……天徳を勝手に荒らされてもいいんか。これまでの(注3)神事がなくなってもいいんか」

「荒らされていいって言ってない。内地人が間違えるのは、決まりを知らないからさ。立ち入り **⑨** キンシの場所とか、この決まりをちゃんと教えればいだけさ。それもしないで **⑩** 文句だけ言うのはおかしい」

「おばあたちが許さんからしようがないだろ。看板ひとつ立てるのも、神様がいいって言わんし」

「神様の答えを何年も待っている間に、なにも知らん内地人が来て問題になってるわけだろ。神様も大事だけど、生きてる人間がなにかするほうが大事っておれは思う」

「保生はこの神様とか、おばあちをばかにしてる」
「してない！ 逆、大事にしてる」

今まで見たことのない、おれの知らない保生だった。保生はいつでも穏やかに笑っていて、争いごとを好まないし、小さい子や女子にだってやさしい。学校で先生に指されても、ぼけっとしていてしばらく気が付かないこともあるくらいなのんびりした男だ。

「征人はどう思う」

孝俊に急に振られて、どう言おうかと一瞬悩んだ。孝俊の気持ちもわかる。孝俊は天徳島が大好きで、とても大事に思っているということとはちゃんとわかっている。でも、それでも、今回の件は見過ごせなかった。

「E……保生に賛成」

孝俊の目つきが鋭くなる。

「そうか。確かに、夕オの事はおれが悪かった。だけど、天徳のこととは話がべつ！」

「べつじゃない！」

保生が **⑪** 間髪を容れずに返す。

「もういい。おれが嫌なら、一緒に遊ばなくていい」

孝俊が背を向けて歩き出した。

「待つて。まだ話終わってない」

保生の声を無視して、孝俊は自転車に乗って行ってしまった。保生と顔を見合わせる。

「なんでよー」

保生は怒っているのではなく、悲しんでいるのだ。

(椰月美智子『14歳の水平線』より)

注1 同じさ——語尾の「さー」は沖繩の方言。この他にも「東京人」

など、会話に沖繩の方言が使われているところがある。

2 内地人も、本島の人間も——「内地」は沖繩以外の地域、「本島」は沖繩本島。離島である天徳島の人々は、他の地域をこう呼ぶ。

3 神事——神様に関する儀式のこと。天徳島に住む人々は、島には独自の神様がいると考えている。

問一 〓線 ①「ウラ」、②「気配」、③「カンタン」、④「カセ

イ」、⑤「サイド」、⑥「無様」、⑦「無造作」、⑧「ツ(み)」、
⑨「キンシ」、⑩「文句」、のカタカナは漢字に直し、漢字
は読み方をひらがなで答えなさい。

問二 〓線 A「質問なのかひとり言なのかわからない一本調子で

言った」とありますが、この他にもタオのしゃべり方の特徴
を表している部分を4ページの本文から探して、13字でぬき
出しなさい。

問三 〓線 B「ここに住んでるなら」とありますが、タオが天徳島

の出身ではないことを表現している一文を4ページの本文か
ら探して、最初と最後の5字をそれぞれぬき出しなさい。

問四 空欄 a、b、c、d に入る最も適切な語を

次から一つずつ選び、それぞれ記号で答えなさい(同じ記号
をくり返し使うことはできません)。

ア そもそも イ いくら ウ すっかり エ また

問五 〓線 C「孝俊、やるなよ」とありますが、保生は孝俊に

どういうことを「やるな」と言ったのですか。20字以内で説
明しなさい。

問六 次の一文を入れる所として最も適当なのは、

の中のどこですか。1～4の数字で一つ答えなさい。

タオんちのおじさんも、男の子は仕方ないよなあ、とここに
こ笑っていた。

問七 〓線 i・iiの語句の本文中の意味として、最も適当なも

のを次から一つ選び、それぞれ記号で答えなさい。

i 「口をつぐんで」

ア すねて

イ だまって

ウ とぼけて

エ しらんぷりして

ii 「間髪を容れずに」

ア ほとんど同時に

イ 身動きせずに

ウ 相手を見ずに

エ 感情を出さずに

問八 〓線 D「こんな保生を見るのははじめてだった」とありま

すが、普段の保生はどんな人物ですか。本文中の語句を使っ
て、40字以内で説明しなさい。

問九 次のア、オの説明について、孝俊の考えには1、保生の考えには2、どちらでもなければ3と答えなさい。

ア 島の外から来た人間は、天徳島を荒らしたり、神事をなくしたりするおそれがある。

イ 島の神様を尊重することも大事だが、生きている人間がすることの方が大事だと思う。

ウ 島の神事や、神事を行う「おばあ」たちのことを、本心では大事に思っていない。

エ 島に住む人間も、島の外から来た人間も、同じ人間なのだから、いじめたりするのはおかしい。

オ 島や神事に関することは、大人が考えればいいのであって、子どもが口を出すべきではない。

問十 —線E『……保生に賛成』とありますが、この時の征人の気持ちとして最も適当なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア タオの見舞いに行った時に、孝俊がきちんと言葉に出して謝らなかつたことが許せないという気持ち。

イ 天徳島が大事だという孝俊の気持ちも分かるが、タオを危険な目にあわせたことは許せないという気持ち。

ウ 島の神様やおばあたちをばかにしているわけではないことを、孝俊に分かってほしいという気持ち。

エ 孝俊の行動に対して怒っているわけではなく、みんなで仲良くできないことを悲しんでいる気持ち。